

合衆國
內國稅年報編纂書

第七編



114
A1842
78

合衆内國稅年報編纂書



第七編

郵便切子ノ事

今ヲ距ル三十年前始メテ郵便切子ヲ設ケ全國内一邊尼ノ切子
 ニテ信書ヲ遞送スルノ法ヲ施行スルヤ本寮印紙局ニ於テハ新
 タニ印紙ヲ製造シテ人民ノ使用ニ供セサル可ラス而シテ當時
 押印ノ封筒ハ之ヲ使用スル者殊ニ多カルヘキヲ察シ「モルレ」
 「氏」ノ發明セル模形ヲ表示スル所ノ封筒ヲ多量ニ製造シ且隱
 起模様ノ押印封筒ト貼付印紙トヲ製造シテ人民ノ擇フ所ニ任
 シタリ然ルニ彼「モルレ」氏ノ模形ヲ表示スル押印封筒ハ
 曾テ之ヲ使用スル者ナキカ故ニ其後ニ至テハ唯貼付印紙ト隱
 起模様ノ押印封筒トノミヲ製造セリ蓋シ此貼付印紙ノ製造ニ
 於ケル印刷人ニ命シ銅鏤ノ延板ヲ以テ印刷シ護謄ヲ其背面ニ

大正十一年四月
大隈侯爵郵寄贈

大正十一年

注付セシムルヲ以テ其間ハ吏員ヲ派シテ之ヲ監視セシムト雖
 此隱起模様ノ押印封筒ニ至テハ本寮押印課ニ於テ為メニ發明
 シタル工程迅速ノ器械ヲ以テ製造シ尋テ普魯士及ニ他ノ外國
 ニテ使用スル器械ヲ製造セリ
 抑々印紙ヲ製造スルニ當リ殊ニ注意セサル可ラサルニ項ノ要
 目アリ具一ハ押印ノ模様ヲ華麗ニシテ之ヲ質造スルニ難カラ
 シメ其ニハ印紙ノ製造費ヲ節減スル即チ是ナリ而シテ貼付印
 紙ノ場合ニ於テハ具料紙印刷及ニ護謄等ノ用費ヲ算入セス又
 隱起模様ノ押印封筒ニ於テハ顔料ノ用費トシテ原封筒ノ價直
 ニ僅少ノ額ヲ増多スルヲ以テ目的トセサル可ラス若シ夫然ラ
 スシテ具製造費ハ配多ノ用費ニ倍シ郵便稅ヲ以テ之ヲ償ハン
 ト欲シテ其稅率ヲ一邊尼ニ除算スルニハ況シテ其收入額ヲ以
 テ之ヲ償フ可ラサルマ必セリ

驛遞局ニ於テ郵便切手販賣ノ盛大ナルマ實ニ人ヲシテ驚カシ
 ムルニ足ル況シヤ其販賣ヲ允可スルノ數年間ニ在テ其代價ヲ
 前拂セシムルノ時ニ於テヤ蓋シ款切手ノ販賣ヲ允可スルノ
 初年ニ於テ其賣却高ハ三十万磅ニ至リ其後漸次増加シテ遂ニ
 千八百六十九年ニ於テハ四百万磅餘ノ多キニ及ヘリ
 郵便切手發行ノ初年ヨリ千八百六十九年ニ至ルマテ毎年ノ賣
 却高ハ左ニ表出スル所ノ如シ

千八百四十年	三〇九、六九三磅
千八百四十一年	四八九、八六九磅
千八百四十二年	五三〇、一八一磅
千八百四十三年	五七四、一五二磅
千八百四十四年	六四五、八三一磅
千八百四十五年	七六九、二八磅

千八百四十六年	七七七、九八二磅
千八百四十七年	八八七、四八六磅
千八百四十八年	八八七、三七五磅
千八百四十九年	九八五、二三三磅
千八百五十年	一、一二五、四〇七磅
千八百五十一年	一、三一三、八三八磅
千八百五十二年	一、五九〇、三三四磅
千八百五十三年	一、七六三、一八四磅
千八百五十四年	一、八八二、六四五磅
千八百五十五年	一、九五〇、五七二磅
千八百五十六年	二、二一二、一七七磅
千八百五十七年	二、四一四、三三一磅
千八百五十八年	二、三八六、二六九磅

千八百五十九年	二、五九三、八三八磅
千八百六十年	二、七六一、二一二磅
千八百六十一年	二、八八五、九四三磅
千八百六十二年	三、〇四一、四五九磅
千八百六十三年	三、二二六、六五四磅
千八百六十四年	三、四〇一、六〇二磅
千八百六十五年	三、六五八、九三〇磅
千八百六十六年	三、七九八、八三〇磅
千八百六十七年	三、九四五、七五一磅
千八百六十八年	四、〇七七、三六七磅
千八百六十九年	四、一四四、二三九磅

隱起模様、押印封筒ハ良シヤ諸種ノ郵便印紙中ニ就テハ甚タ
 著明ナラサルモ其製造高ニ於テハ未ク全ク僅々ナリト云フ可

ラス是レ一日ノ間ニ製造スル封筒ヲ排列スル片ハ其長キ一六
里ニ下ラサルヲ以テ微スルニ足レリ
千八百四十一年始メテ此封筒ヲ製造スルニ當テヤ一種ノ料紙
ヲ以テ之ヲ製シ其料紙中ニハ三色ノ糸線ヲ織入セリ是レ當時
ニ於テ政府ノ歳入ヲ保護スル為メニ須要ナリト思惟スルカ故
ナリ然リト雖モ又一方ニ於テハ第一通常ノ用紙ニ比スレハ其
質ノ粗悪ナルト第二又民ノ齎シ來ル封筒ハ自ラ紙質廣狹及ヒ
模形等ノ異ナル所アルヲ以テ其請求ニ應シテ押印ス可ラサル
ノ不便ナルヲ免レス依テ千八百五十五年ニ於テハ糸線織入ノ
料紙ヲ以テ製造スル一ヲ廢シ今ヤ本寮ニ於テ押印ノ封筒ヲ發
行スト雖モ何又ヲ問ハス押印ヲ請ハント欲スル者ハ一定ノ規
則ニ遵テ其欲スル所ノ封筒ヲ携來シ得又其規則書ハ本寮局ニ
就テ求ムルヲ得セシメリ而シテ千八百六十八九年間人民ノ携

來スル封筒ニ押印シタル數ハ千八百萬餘ノ數ニ及一リ
既ニ蒸氣器械ヲ以テ隱起模様ノ押印ヲ為スニ其効顯ノ著明ナ
ル登々トシテ掩フ可ラサル者アルヲ以テ今ヤ一步ヲ進メテ他
ノ押印ニ及ホシ以テ人民ノ請求ニ應セハ却テ其用費ヲ節減ス
ルニキルヘキヲ信シ之ヲ新聞紙ノ押印ニ及セリト雖モ邊ニ好
結果ヲ呈スルニ至ラス是レ他ナシ原來新聞紙幅ノ廣大ナルヤ
器械ノ運轉ニ從テ自由ニ之ヲ送回スルヲ得サレハナリ然リト
雖モ嚮ニ隱起模様押印器械ノ成効アリテ既ニ其端緒ヲ發シタ
レハ幾多ノ艱險ヲ經テ遂ニ其功ヲ奏スルニ至レリ
押印局長ノ建議ニ據ルニ新聞紙ヲ印刷スルニ當リ本寮ヨリ極
印トテルテールト稱スル示端器械トヲ供シテ印刷器械中ニ組
入レ以テ一次ニ新聞紙ヲ印刷セシメハ特リ本寮ノ便益ナルノ
ミナラス新聞紙ノ持主ニ於テモ亦其利ヲ享有スルヲ得ヘシト

然ルニ其事タル頗ル重大ノ疑問ニ属スルヲ以テ遂々シテ敢テ
決セサリシカ遂ニ之ヲ「タイムス新聞紙」ニ施シ尋テイル、スト
レーテツド、ロンドン「新聞紙」及ヒ「スタシホールド、メルキユリ」
新聞紙ニ及シタリト雖ヒイル、ストレーテツド、ロンドン「新聞
紙」及ヒ「スタシホールド、メルキユリ」新聞紙ノ器械ニ於テハ其
塗墨器ト活字櫃ノ互ニ回轉スルノ迅速ニシテ且相軋ルノ甚シ
キ為メニ「蹄教」ヲ標示スル器械ヲ組入ルヲ得ス加之嚙ニ新聞紙
ノ押印ニ關スル法令ノ一部ヲ廢止スルヤ其持主ハ已ヲ得ス夫
ノ極印ト「テ」ル「テ」ル器械トヲ除去シテ新紙ヲ印刷スルノ已ヲ
得サルニ至レリ然リ而シテ此等ノ難事ハ當時ニ於テハ實ニ避
ク可ラサル者ト為セシモ漸次實驗ヲ經ルニ隨テ終ニ其印ヲ奏
スルヲ得タリ

始メ各種ノ新聞紙ニ押印ヲ要スルノ時ニ方テヤ器械ノ使用ハ
實ニ巨額ノ用費ヲ節減スルヲ得タリト雖ヒ一旦驛遞局ヲ經テ
配達セサル新聞紙ノ稅ヲ廢止スルニ及ンテハ其用費ノ節減ハ
為メニ大ニ從前ヨリ減スルニ至レリ

貼付郵便切手ニ穿孔スルノ方法ハ曾テ稅務ニ關セス又器械學
ニ精熟ラザサル紳士ノ計畫スル所ニ因テ其工程ノ迅速ナルヲ
致シ且其經費ヲ節減スルヲ得タリ抑々郵便切手ノ料紙ヲ濕シ
テ之ニ印刷スルヤ其料紙ノ乾燥スルニ隨ヒ動モスレハ伸縮シ
テ紙幅ノ廣狭ヲ同セス故ニ穿孔スルニ於テ亦之ニ應スルノ器
械トナル可ラス然ルニ「トビヤ」及ヒ「ソ」會社ハ幾多ノ實驗ヲ經
テ遂ニ一器械ヲ發明シ其後頗ル改製スル所アリテ始メテ完全
スルニ至リシカ故ニ今ヤ專ラ此器械ヲ使用シテ郵便切手ノ穿
孔ニ供ス

千八百五十三年印紙穿孔器械ヲ製造スルニ方テヤ議院ニ於テ

ハ隱起模様及ニ貼付領收印紙ノ一邊ニ値スル者ヲ發スルノ
議ヲ決シ又大藏卿ハ夫ノ貼付領收印紙ニ穿孔スルニ非サレハ
之ヲ發行ス可ラサルヲ令セシヲ以テ穿孔器械ノ拔功スルマ
直ニ之ヲ實際ニ試ルヲ得タリ然リ而シテ今ヤ本寮ニ於テハ穿
孔器械五基ヲ以テ毎日一萬五千葉ノ印紙ニ穿孔シ其中ニ就キ
印度錫蘭「モリキアス」及ニ其他ノ植民地ニ供給スル者ハ千百葉
トリトス「千八百五十三年」

隱起模様ノ一邊ニ領收印紙ハ固ヨリ尋常ノ手工器械ヲ以テ之
ヲ製造ス然ルニ幾モ十ク銀行手形ニ一邊ニ印稅ヲ課スルニ
及テハ本寮ニ於テ押印ノ事務ヲ負擔スル共從前ニ幾倍トルヲ
知ル可ラス況ンヤ課稅ノ法ヲ發スルノ日ニ於テ全國ノ銀行者
カ各々手形ヲ携テ押印ヲ請フノ數ハ唯一日ニシテ百萬枚ノ多
クニ至ルニ於テマ如斯トルカ故ニ本寮ニ於テハ幣造工程

ヲ速^セメンカ為メニ交收者ト押印者トヲ三組ニ分テ印紙ノ製造
ニ從事シ又他ノ使用ニ供スル器械ノ如キモ速ニ其方向ヲ変シ
テ專ラ此事ニ適セシメ^リ加^ヘ之此際ニ於テ別ニ一器械ヲ新製
シテ十四日ノ間ハ晝夜ヲ分タス之ヲ運轉シ二十四時毎ニ五萬
枚ヲ製造シタレハ始メ一日間ニ製造スル四萬ノ隱起模様無色
印紙ハ僅ニ三週間ヲ經テ四十萬枚ニ達セリ「千八百五十八年」
如斯キ非常ノ製造ハ其局ヲ結ヒ漸ク常務ニ復セリト雖モ本寮
ニ於テ毎日無色印紙ヲ製造スルノ數ハ之ヲ從前ニ比スルニ殆
ント三倍ニ至ルカ故ニ新タニ器械ヲ製造シテ其工程ヲ速ニシ
且從來ノ經驗ニ因テ其方法ヲ改良セサル可ラス
稅率ヲ昂シテ其計數ヲ減却センヨリハ寧口之ヲ低シテ其計數
ヲ増多スルニ如カストノ政略ハ漸次之ヲ他ノ稅法ニ施シ或ハ
金額ノ多寡ニ從テ課スル所ノ重稅ノ率ヲ減シテ其計數ヲ増多

シ或ハ從來裁判所及ヒ官衙等ニ於テ課スル所ノ謝金ハ現金ヲ
收納スルノ法ニ代ルニ印紙ヲ以テシ或ハ又方今「カベンナシ」烟
草稅養犬免許稅及ヒ電信局ノ謝金等ハ印紙ニ因テ收納スルノ
制ヲ設ケテヨリ印紙局ノ事務ハ日ヲ逐テ増加セリ蓋シ此等ノ
改変以テ印紙ヲ供給スルノ數ハ異時増減浮沉シテ敢テ一定セ
ズ現ニ容秋ニ於テハ電信局ノ使用ニ供スル為メ遽ニ驛遞局ヨ
リ二百万枚ノ印紙ヲ請求スルヲ以テ毎日四万枚ノ割合ニテ之
ヲ製造シ入農業ノ統計ニ関スル百万餘ノ印紙ハ通常僅少ノ時
間ニ之ヲ須要シ養犬免許狀ニ於テハ殆ント百五十万枚ヲ須要
ス然ルニ今ヤ本寮ニ於テハ尋常ノ印紙一日ノ平均二十三萬餘
ヲ製造スルノ外尚如斯キ特殊ノ請求ニ應スルヲ得ル所以ノ者
ハ他ニ非ス或ハ器械ヲ運轉シテ其工程ヲ速ニシ或ハ他ノ方法
ヲ以テ其作用ヲ簡便ニシ又或ハ少シク役員ヲ增多スルニ因ル

十
リ

夫器械ノ運轉ヲ監視スルノ事タルヤ其業甚タ簡易ナルヲ以テ
幼童ヲ役スルニ若クハ無シ而シテ其眞數ハ固ヨリ器械ノ裝置
盛大ナルニ從テ増加セサルヲ得ス故ニ方今ニ於テハ恒ニ八十
四名ヲ使役シ半ハ器械ノ運轉ヲ監視セシメ半ハ從前壯夫ニ任
スル所ノ工業ヲ擔當セシム蓋シ此等ノ幼童ハ各々勉勵シテ能
ク規則ヲ守リ終始心ヲ本業ニ委子テ敢テ怠慢スル所ナク動作
敏捷ニシテ大ニ信依ヲ措クニ足ルヲ以テ監督ノ官吏タル者ハ
須ラク彼等ノ性質ニ注意シテ褒賞スル所ナカル可ラス此ニ於
テカ嚮ニ大藏卿ノ許可ヲ得テ幼童押印者ノ一級ヲ設ケ器械室
ニ役スル四年以上ニ至ル者ヲ選拔シテ之ニ充ツ然リ而シテ此
幼童ハ器械室ニ使役スル數名ノ中ニ就テ拔擢スル者ニ係ルカ
故ニ其取ル所ノ事半茶ノ一點ニ就テハ却テ嚮ニ使役シタル壯夫

ニ優リ且其工賃ハ僅ニ夫ノ壯夫ノ半額餘ニ至ルヲ以テ本寮ノ
經費ヲ節減スル甚タ尠シトセス又此幼童等ハ年漸ク長シテ事
業ニ熟練スルニ至ラハ其工賃モ亦隨增加シ遂ニ丁年押印者ノ
下等給ヲ兼ケ而シテ後ヲ始メテ本級ニ進轉スルヲ得ヘシ
前政府ノ内閣大臣カ本寮ヲ巡視スルニ當リ幼童ヲ使役スルノ
効驗著明ナルヲ目撃シテ遂ニ其方法ヲ驛遞局ニ及ホスニ至
レリ

既ニ如斯ク幼童ヲ使役シテ業務ヲ進捗シ器械ヲ運轉シテ工程
ヲ速シ以テ其經費ヲ節減シタリト惟氏今猶其結果ニ関シテ一
言セザル可ラサル者アリ何ソヤ今ヲ距ル二十年
前本寮ヲ増築
シテ押印室ト為シタル部分ハ苟モ前ニ記スル所ノ事業ヲシテ
進捗スル莫カラレヌハ或ハ狹隘ニシテ其用ニ適スルニ足ラザ
ルヤ必セリ然リ而シテ今日ノ情勢ヲ以テスレハ其洋費ハ日ヲ

逐テ増加スルモ未タ全ク巨費ヲ抛キ更ニ増築スルノ或ニ至ラ
ス尚數年ヲ遷延スルヲ得ヘキナリ
又經費ノ一點ニ就テハ些少ノ作用法ヲ変スルニ因テ大ニ之ヲ
節減シタル者アリ即チ(第一)原永羊皮紙ハ分明ニ押印ノ痕ヲ留
ムルニ之シキヲ以テ之ニ紙ヲ附着セシカ一タニ單純ノ器械
ヲ發明シテ其作用ノ方法ヲ簡易スルカ為メニ一年ノ經費千磅
ヲ節減シ又第二從來六邊形ノ印稅ヲ課スル尋常ノ証券ハ之ヲ
使用スル極メテ多ク隨テ押印ヲ請ハント欲シ願書ヲ呈スルノ
數ハ毎日百四十通ニ下ラス然ルニ今ヤ押印シタル証券ノ號數
ヲ記スル器械ヲ發明シテヨリ當ニ政府ノ簿冊ニ其號數ヲ登記
スルノ勞ヲ省クノミナラス為メニ亦多少ノ經費ヲ節減シタル
カ如キ是ナリ
從來人民ノ本寮ニ詣テ押印ヲ請フマ或ハ願書ヲ呈シ或ハ証券

ニ押印シ若クハ既ニ押印スルノ後之ヲ交付スル際ニ於テ動モ
ハレハ時刻ヲ遷延スルヲ以テ人民ノ之ヲ愁訴スルマ甚ク多シ
故ニ本寮ニ於テハ務メテ此等ノ不便ヲ除カント欲シ尋常ノ証
券ハ記號印刷器械ヲ以テ其號數ヲ記シテ之ヲ本人ニ交付シ本
人ハ計算課及ヒ納金課ヲ經テ押印課ニ送達スルヲ以テ先後ノ
順序ハ整然トシテ畫一シ亦昔日ノ雜選スルカ如クナラヌ又受
付課及ヒ押印課ニ於テ押印スルキ証券ノ堆積スルマ順序ヲ遂
テ之ヲ區處スルノ難キヲ致セシカ今ヤ一器械ノ發明ニ因テ之
ヲ除去スルヲ得タリ然リ而シテ今ヤ人民ノ愁訴ハ頗ル減スル
所アルヲ以テ如斯ク時間ノ浪費ヲ防カシカ為メニ設ケタルノ
方法ハ蓋シ其効ヲ示ト云フ可ラサルナリ

貼付印紙ノ事

千八百五十三年前ニ在テ貼付印紙ハ特リ郵便切手ノニ限り

シカ此年ニ至リ従前ノ從價稅ヲ廢シテ領收証書及ヒ券ニ一
邊元ノ定額稅ヲ課シ貼付印紙ニ因テ之ヲ收入セリ而シテ此法
ハ人民ニ便益ヲ興フル極メテ大ナルヲ以テ幾モ十ク許多ノ内
國稅ニ及シ又之ヲ裁判所ノ謝金ニ及シタリシカ其効驗ハ歴々
トシテ掩フ可ラサル者アリ若シ夫然ラズシテ此謝金ヲ收入ス
ルニ貼付印紙ノ便ニ因ルニ非スハ焉ソ能ク許多ノ難事ヲ排
撃スルヲ得ヘケンマ然リト雖モ本寮ニ於テハ更ニ貼付印紙ノ
法ヲ擴充シテ他ニ及ホサント欲スルニ決ス其裁判所ノ謝金ニ
使^用セシムルハ蓋シ然ラサルヲ得サルノ理由アレハナリ夫謝金
ヲ課スル所ノ証券タルマ必ス法官ノ查檢ヲ經ヘキヲ以テ至當
ノ印紙ヲ貼付セシムルヲ保スルニ足ルト雖モ其之ヲ今日施行
スル所ノ証券ニ求サルモノニ及ホスニ至テハ固ヨリ良策ニ非
サルヘシ殊ニ永久ニ傳フヘキ証券ノ如キハ其最モ著明ナル者

ナリ何トナレハ則チ貼付印紙ハ情勢ノ己ム可ラサル場合ニ於
テノミ之ヲ使用スル者ナルカ故ニ當ニ政府ノ歳入ヲ保護スル
ニ足ラサルノミナラス其故意ニ成ルト過誤ニ出ルトチ問ハス
苟モ之ヲ剝去ル_レア_ラハ人民ヲシテ危險ニ陥ラシムルノ患_ア
レハナリ

貼付印紙ヲ製造スルニ其經費ヲ要スルマ極メテ多シ其原紙ハ
税率ノ同シカラサルニ隨テ之ヲ異セサルヲ得ス而シテ其價直
ハ少クモ百二十磅ニ下ラス加フルニ或ハ印刷シ或ハ護謨ヲ抹
シ又或ハ小孔ヲ穿ツノ費用アリ之ニ反シテ極印ノ價直ハ紙或
ハ羊皮紙ニ押印スルノ費用ヲ併算スルモ僅ニ十磅ニ過キサル
ノミ
又貼付印紙ハ雇人ノ為メニ掠去ラル_レノ患アリ是レ當ニ郵便
切手貼付ノ信書ヲ驛遞局ニ送ルニ際シテ之ヲ剝取レ_レ因ルノ

ミナラス内國稅印紙ニ於テモ亦其弊害ナレトセズ然ルニ従来
本寮ニ於テハ其印紙タル_レチ確認スルノ便益ヲ妨ケンヲ恐レ
之ヲ織ス_レチ許サ_レリシカ前ニ云フ所ノ事情アリテ人民ノ怒
訴スルヲ免レス依テ終ニ使用者ノ印ヲ印紙ノ上部ニノミ捺ス
ルヲ許シテ皇帝ノ畫像ヲ織ス_レチ得サ_レシメタリ
貼付印紙ヲ使用シテ印稅ヲ納ムヘキ諸証券ハ左ニ提記スル所
ノ如シ

領收證書	高券
為換證券 <small>外國ニテ振出シ クル者ニ限ル</small>	
振出子形	現金交付證書
契約書	投票委任狀
投票原紙	船槽證書
子形契約書	或ル賃地証券

トノ間ニ争端ヲ發スルノ原因トナリ後チ查尔斯王ニ世ノ時
ニ至テ公ケニ之ヲ廢止スルマテハ猶依然トシテ創立セリト
雖モ實際ニ於テハ既ニ内乱ノ起ルニ際シテ其權力ヲ失ヒタ
リ其官衙ヲ廢停スルノ律文ニ曰ク從來ノ經驗ニ據ルニ「フ
ルト、オフ、ワルド」ノ處置タルヤ時リ國王ニ於テハ益スル所ナ
キニ派スト雖モ全國人民ノ為メニハ苛察ノ政迹タルニ外ナ
ラス且チ千六百四十五年第二月二十五日ニ於テ此官衙ヲ中止
セシ以采軍務ノ為メニ所有スル土地ハ遺言等ニ依テ之ヲ賣
却スル者少シトセス故ニ今ニシテ之ヲ防クノ方法ヲ設ケス
ンハ他日必ス救フ可ラサル弊害ヲ生スヘシ云ト而シテ「ハ
ラム」氏カ云ヒシ如ク國王ノ金庫ニ注入スル泉源ハ全ク乾涸
シテ亦流出スルノ期ナキニ至リシカ故ニ議院ニ於テハ新夕
ニ國產稅ヲ課シテ之ヲ補タリ

千六百四十五年ヨリ千六百九十四年ニ至ルノ間死セズノ所
有物ヲ繼承スルノ稅ハ未ダ之ヲ課スルノ設アラザリシカチ
六百九十四年第六月始メテ維廉及ヒ馬利第二十一章ヲ以テ
荷蘭ノ法ニ擬シ遺言及ヒ遺物管理上ノ印稅ヲ施行セリ蓋シ
該稅ノ率タルニ十磅ニ超過スル所有物ニハ僅ニ五司令ヲ課
シ其後四年ヲ經テ他ノ証券ノ課稅ニ堪ヘサル者ニハ二磅ヨ
リ四磅ニ至ルノ重稅ヲ課セシメ特リ遺言及ヒ遺物管理上ノ
印稅ニ至テハ漸ク十司令ニ増加スルニ過キザリマ
此輕稅ハ千七百七十九年ニ至ルマテ八十五年間ニ施行セシ
カ此年第八月ニ於テ始メテ三百磅ニ超ヘサル所有物ニ限リ
其價格ノ増進スルニ隨テ其率ヲ昂シ千七百八十三年ニ於テ
八千磅以下ノ所有物ニ及ヒシ千七百八十九年ニハ一万磅以
下ト為セリ又千八百一年ニ於テハ普シク其率ヲ増加シテ十

万磅ノ所有物ニ及ハシ千八百四年ニ至テハ五十万磅以下ト
シ遂ニ千八百十五年ニ及テハ方今施行スル所ノ重税ニ達セ
シノ以テ百万磅以下ノ所有物ニ課セリ此稅其後ニ至テ之ヲ參觀ハシ並シ千八百十五年前ニ在テ遺言稅及ヒ
遺物管理稅ハ其率タル彼此同一ニシテ敢テ異ナル所ナリ
シカ其後ニ至テ遺言稅ニ十レハ遺物管理稅ハ三ノ比例ヲ以
テ之ヲ増加セリ

愛爾蘭ノ遺言稅及ヒ他ノ印稅ハ千七百七十四年ニ於テ始メ
テ之ヲ施行シ所有物ノ價值三十磅ニ超過スル者ニハ各々遺
言稅或ハ遺物管理稅ニ司令ヲ課セシカ其後千八百四十二年
ニ至ルノ間ニ在テハ大ニ其率ヲ増加セリ雖氏又千八百四十
倫ニ於ケル遺言稅等ノ昂重ナルカ如クナラス又千八百四十
二年ニ及シテハ假リニ其率ヲ増加シテ英倫ニ於テ課スル所

ノ域ニ至ラシメ後千八百五十三年ヲ以テ永久ニ施行スヘキ
者ト為セリ

蘇格蘭ニ於テハ千八百四年前ニ在テ曾テ遺言稅ニ類似スル
者ヲ施行スルヲ無ク此年ニ至テ始メテ英倫ニ比シキ稅ヲ課
セリ雖氏實際ニ於テハ敢テ輕重ノ差異ナキニ非ス
蘇國ニ於テ新教ヲ創設スルマ遺言ヲ證明スヘキ教法裁判所
ノ代理人ハ之ヲビレヨツブ中ヨリ撰擧シテ國王ニ屬シ各遺
物受托人ヲシテコンフルメシヨント稱スル証書ヲ領セ
シムルノ職任ヲ帶ハシメタリト雖氏實際ニ於テハ其權ヲ施
行セシメ無ク為メニ大ニ政府ノ歲入ヲ妨害シタルヲ以テ千
八百八年此法ヲ改正シテ蘇國ニ於テ繼承スヘキ所有物ニハ
總テ遺物目錄ヲ教法裁判所ニ呈セシメタルハ遺物目錄上ノ
印稅ハ遽ニ其額ヲ增多セリ然リ而シテ該地ノ慣習ニ因テ人

民ハ猶今日ニ至ルマテ始メニ遺物目録ヲ登記シ或ハ「コン」
ヲル「マ」レシヨシ「証書」ヲ領スル「マ」テ「ク」レテ「死」セ人ノ所有物ヲ
繼承スル者往々之アリド雖モ英蘇ニ國ニ於テハ否ラヌ遺言
狀ノ檢査ヲ得ルニ先テ其所有物ヲ措置スル「マ」テ甚ク「勘」テキカ
故ニ蘇國ノ遺物目録ニ比スレハ「其」稅ヲ收ムル速ニシテ脱稅
ノ患アル「マ」テ無シ

遺物稅ハ千七百八十年第七月始メテ蘇愛ノ兩國ニ於テ遺物
ノ領收證書上ノ印紙ニ因テ之ヲ課シ千七百八十三年第八月
ニ至テ其稅率ヲ增加シタリ然ルニ此收稅ニ関シテハ曾テ領
收証「マ」キノ場合ニ於テハ決シテ該稅ヲ課ス可ラスト「ノ」訴訟
起リシ「^片」始メテ法詔ノ誤謬ニ出テタル「マ」テ查出シ實ニ判事
「^レ」ス氏ハ遺物稅法ノ誤謬ハ唯ク遺物ノ領收證書「^レ」ニ稅
ヲ課シテ其遺物上ニ課ス可ラサルニ在リト云ハ「^レ」如斯ナル

乃故ニ今マ該稅ヲ課スルニハ必ス稅法ヲ改正セサル可ラサ
ルニ至リ遂ニ千七百九十六年ヲ以テ新クニ遺物稅ヲ課スル
ノ法ヲ制定施行セリ而シテ當時ニ於テ制定セル法ハ概テ方
今施行スル所ノ者ニ異「マ」ラズシテ其稅率ハ即チ左ニ揭示ス
ルカ如シ

- 死亡人ノ兄弟姉妹及「^レ」子孫 百分ノ二
- 死亡人父母ノ兄弟姉妹及「^レ」其子孫 百分ノ三
- 死亡人祖父母ノ兄弟姉妹及「^レ」其子孫 百分ノ四
- 其他ノ人 百分ノ六
- 死亡人ノ夫妻子及「^レ」其祖先 無稅

而シテ該稅ハ千七百九十六年第四月後ニ死亡スル者ノ動産
ノニニ限リシカ此時ニ當テ「^レ」ソト氏ハ比シク之ヲ不動産ニ
及「^レ」ホサント欲シ其議案ヲ下議院ニ紹介セシニ之ヲ可「^レ」否スル

者相半シ遂ニ第三讀會ニ至リ議長ノ否決ニ因テ終ニ其原案ヲ廢止シタリ
千八百四年ニ於テハ千七百九十六年ヲ以テ制定セル二分ノ稅ヲ増加シテ二分半ト爲シ又六分ノ稅ヲ増加シテ八分ト爲シ且稅法中死亡ノ年月ヲ問ハスレテ遺物稅ヲ課ストノ一款ヲ追加セシカ故ニ此時以來ハ繼承人ノ所有權ヲ得ルノ年月如何ヲ問ハス其利益ヲ享有スル時ニ於テ課稅スルニ至レリ
千八百五年ニ於テハ遺物稅ノ區域ヲ擴充シテ子孫ニ及ボシ以テ其稅率ヲ一分ト定メ其親戚ニ及ボル者ニテ繼承スル遺物稅八分ヲ増加シテ一分ト爲シ猶之ヲ不動産及ヒ死亡人ノ遺言ニ因テ賣却シタル不動産ヨリ生スル價金ニ及ボシタルヲ以テ曾テ^四ツト氏カ千七百九十六年ニ於テ發議シタル課稅案ハ之ニ至テ始メテ行ハレ大蔵省ハ爲メニ大ニ其歲入

ヲ增多スルヲ得タリ

千八百十五年ニ於テハ更ニ一步ヲ進メテ父母及ヒ正統ノ祖先ニテ繼承スル遺物ノ稅ヲ課シ又從前ノ二分半稅ハ三分トシ四分稅ハ五分稅ハ六分ト爲シ以テ今日ニ至ル
愛爾蘭ノ遺物稅ハ千七百八十五年ヲ以テ始メテ之ヲ施行シ其後許多ノ法令ニ因テ漸次其率ヲ増加セリ又該稅ノ收納方法ハ慈尔日三世第五十四章ヲ以テ制定スル者ニ據ル然リ而シテ該國ノ稅ハ猶他ノ印稅ニ於ケルカ如ク之ヲ英蘇二國ニ比スレハ其率甚ク低ク其英蘇ノ二國ニ比均スルニ至リシハ千八百四十二年ニ在リ
遺言稅遺物稅及ヒ相續稅ハ印稅ノ科目中ニ膾列スト雖其實ニ証印ニ因テ賦課スル者ハ唯遺言稅及ヒ相續稅ノ二種ナルノミ然リ而シテ此印稅ヲ賦課スルノ法ハ遺言狀檢査局及ヒ其支

局ニ於テ發行スル所ノ証書ニ証印ヲ押スニ在リ故ニ遺物管理
者ハ其押印証書ヲ領スルニ非サレハ死七人ノ財産ヲ處分スル
ヲ得ス而シテ其稅額ハ財産ノ多寡ニ從テ昂低ノ差異アリ
蘇格蘭ニ於テ從承遺言狀ヲ檢査スル所ノ教法裁判所ヲ廢止ス
ルマ印稅ヲ課スルノ方法モ亦自ラ異ナラサルヲ得ス今其概略
ヲ示サンニ管理者ハ先ツ遺物目錄ニ証印ヲ請ヒ之ヲ代理人前
リ詳ニ呈シテ檢印ヲ受ケ而シテ後始メテ其遺物ヲ處分スルヲ
得ヘキナリ然リト雖モ其英蘇兩國ノ間ニ異ナル所ハ當ニ之ノ
ニ止ラズ英倫ニ於ケル管理者ハ唯死七人ノ財産ノ價直ハ若
干ナルヲ誓ヒ敢テ其細目ニ及ハサルモ蘇格蘭ニ於テハ然ラ
ズ管理者ハ其財産ノ各目ヲ詳記シテ之ニ誓詞ヒサル可ラス此
法ハ愛爾蘭ニ於ケルモ亦既ニ然リトス如斯ナルカ故ニ今ヤ此
種ノ稅法ヲ記スルニ當ラハ彼此錯雜スルノ患ヲ避ケンカ為ニ

持リ英倫ニ於テ施行スル所ノ者ヲ掲ケ其差異アル場合ニ於テ
ノニ蘇格蘭ノ法ヲ示サ、ル可ラス
遺物管理者ニ於テ第一ニ履行スヘキ要件ハ遺言稅ヲ收納スル
ニ在リ何トナレハ則チ若シ管理者ニシテ之ヲ納メサレハ死七
人ノ所有物ヲ処分スルヲ得レハナリ然リ而シテ遺稅ヲ收入ス
ルニ就テ緊要ナル保護ハ恰モ一般ノ印稅ニ於ケル如ク証印
アル証書ニ非サルヨリハ之ヲ認メテ確實ノ誓ヒサルニ在ル
ヲ以テ世人カ之ヲ評シテ自ラ收入スルノ稅ナリト云フモ決シ
テ証書ニ非サルナリ蓋シ本寮ニ於テ該稅ノ應サニ收入スヘキ
ヲ知ルハ遺言裁判所ヨリノ報ヲ得ルカ為メナリ如ノ遺言裁判
所ニ遺言狀ニ檢印スルヤ裁判所ヨリハ其寫書ヲ本寮ノ遺物稅
檢査課ニ送致ス然リ而シテ裁判所ハ証印ナキノ遺言狀ヲ送致
スヘキノ理由ナキヲ以テ檢査課ニ於テハ必シモ証印ノ當否ヲ

調査スルヲ要セスト雖氏談税ノ收入ニ就テ後証ト為スヘキ者
ハ特リ夫ノ寫書ニ在ルカ故ニ本寮ニ於テハ必ス之ヲ保存セサ
ルヲ得サルナリ

遺言狀寫書ノ到達スルマ遺物税検査課ニ於テハ遺物ノ價格并
ニ其餘産及ニ不動産ノ配分額ヲ表記シ而シテ後遺物管理者ニ
告知スルニ法令ニ依テ限ル所ノ期日内ニ於テ遺物ノ計算書ヲ
呈シ且其税ヲ納ムヘキヲ以テス又相續税ニ関スル告知ハ特リ
遺物管理者ニ送ルノミナラズ尚相續人若クハ相續税ヲ收納ス
ヘキ義務ヲ有スル所ノ代理人ニ於テモ亦之ヲ送付ス蓋シ遺物
管理者及ニ相續人タル者ハ本寮ヨリノ告知ヲ得サルモ必ス遺
物ノ計算書ヲ呈シ且其納^税メサル可ラサルノ規法タルカ故ニ其
告知ナキヲ口實トシテ納税ノ期日ヲ遷延スルヲ得サル者トス
管理者ニ於テ遺物ヲ處分シ了ラサルカ為メニ遺言狀ニ記スル

所ノ日附ヨリ十有二月ヲ起ヘ猶計算書ヲ呈セサルハ本寮ニ
於テハ書狀ヲ送テ直ニ納税スヘキ從シ猶之ヲ等閑ニ付スル^ハ
ハ六箇月ヲ經テ更ニ第二ノ告知書ヲ送ル若シ此第二ノ告知ヲ
得テ満足スヘキ理由ヲ具陳セサレハ滿二年ニ至リ延滞税トシ
テ之ヲ本寮ノ訟師ニ付シ公裁ヲ仰カシム

レウエルレヨナリ^{普通ノ遺物トシテ}其ノ遺言ニ因テ若キ年^所間^ハ其^ハ他^ハ
人^ニ與^ヘ其^日ニ^至テ^之ヲ^編嗣^或ハ^具及^ニ臨^時遺^物税^ヲ處^分
宗^家ニ^與ヘ^ルム^ルニ^シテ^之ヲ^云フ^ノ及^ニ臨^時遺^物税^ヲ處^分
ノ方法ハ素ヨリ普通ノ遺物税ト相同カラス蓋シ從來ノ例規ニ
據ルニ此ニ種ノ遺物税ハ遺言狀ニ記スル所ノ日ヨリ十五年間
ハ之ヲ不問ニ付シ其時ニ至テ始メテ其目錄ヲ製シテ遺物管理
者ニ送り遺物ノ果シテ真ノ所有ニ歸セシマ否ヲ推問シ若シ其
回報ヲ得サレハ六箇月ヲ經テ再ニ推問書ヲ送ルヲ恒トス然リ
而シテ曾テ管理者ニ於テ此推問ニ答ヘサル^ハ地方ノ收税官吏

ニ令レテ住家ヲ探檢セシメタルニ漸ク教日ヲ經テ其所在ヲ審
シ以テ納稅セシメタル事アリキ
此種ノ遺物稅ノ未タ納ラサルマ始メ遺言狀ヲ調査スルノ後五
年ヲ經テ本寮ノ帳簿ニ就キ再々之ヲ點檢シ猶未タ收納セサレ
ハ五年毎ニ之ヲ點檢シテ遂ニ其結ヲ了スルニ至ル蓋シ此定期
ノ調査ヲ為スヤ特リ該稅ノ收入ヲ促ス為メノミニ此ノ許多ノ
財産中或ハ普通ノ期限ヲ延シテ其收納ヲ緩假セサル可ラサル
者アリ或ハ督促推問セサル可ラサル者アリテ其狀況タル蓋シ
一ニシテ足ラサレハナリ然リ而シテ斯ノ如ク其事項ニ應シテ
之ヲ処分スルハ頗ル煩擾ナキヲ免シサルモ今ヤ漸ク以テ精密
ノ點ニ達スルヲ得タリ

千八百五十三年哥刺士斯頓氏ハ相續稅ヲ始創シテ從來遺言ノ

有無ヲ問ハス人民ノ死亡ニ因テ讓与スル動産ニ課スル所ノ遺
物稅ヲ改メテ更ニ各種ノ動産不動産ニ及ホセリ是ニ於テ乎夫
ノ死亡ニ因テ其妻ニ讓与スヘキ不動産等ハ始メテ收稅科目中
ニ列スルニ至シリ
是ヨリ先キ彪士氏ハ千七百九十六年ヲ以テ遺物稅ヲ擴充シテ
或ル不動産ニ及ホサント欲シ其議案ヲ議院ニ紹介セシニ下院
ノ^論議ハ可否相半シ終ニ議長ノ否決ヲ以テ之ヲ廢棄スルニ至リ
シハ猶トレタル氏ノ報告書中ニ記スル所ノ如シ尔来彪士氏ノ
鞦ニ倣テ之ヲ賦課センコトヲ企テシ者アリト雖モ其議遂ニ行ハ
レスレテ千八百五十三年ニ於テ哥刺士斯頓氏ノ奏功ノ時ニ至
リシナリ
抑々相續稅ヲ施行スル法則ニ関シテ疑難ヲ生スルノ點タルヤ
甚ク甚クトセス然リト雖モ今日ノ法ハ所有品ヲ賣却シ或ハ之

ヲ譲與スヘキノ方法ニ就テ喙ヲ其間ニ容ル、莫ラシクテ要シ
テ殊ニ制定スル所ノ者ナルカ故ニ要スルニ今日ニ在テ異説ヲ
主張シテ之ヲ駁撃スル者ハ甚タ罕ナルカ如シ
始メ相續稅ヲ施行スルマ豫算ニ比スルニ其收稅ノ少キヲ以テ
本憲ニ於テ之カ見解ヲ下サシムヲ冀望スル者アルヘシ然リト
雖モ此事ニ就テハ實ニ充分ノ説明ヲ付スルニ由テキテ如何セ
シマ抑々千八百五十三年下院ノ討議中ニ於テ恒ニ確説ヲ持ス
ル議員ハ舉テ相續稅ノ大ニ政府ノ歳入ヲ増加スヘキヲ斷言シ
既ニ「ミルリング」氏ハ三百萬磅ノ増額ヲ得ヘシト豫算シ又「ケイ
ルンス」氏ハ遺言ニ因テ譲與スル所有品ハ決シテ随意ニ分割ス
ヘキ者ノ巨額ナルノ比ニ冰サレ氏必ス四百萬磅ノ收稅額ニ至
ルヘシトシ同僚中ノ定説ハ即チ如斯ナリト云ヘリ其上院ニ在
テ「ロールト」ベル子ル「氏」亦其收額ヲ四百萬磅餘ニ至ルヘシト

算シタリ然ルニ本憲ノ官吏ニシテ能ク稅務ニ通曉スル者ハ二
百萬磅ニ非サレハ之ヲ保証スルヲ得スト云ヒタルニ其説ニ抗
スルノ論者ハ大ニ其額ノ充足ナラサルヲ辯セリ
夫レ彼此豫算ノ逕迂スルマ如斯ク其レ甚シキニ際シ焉シソ特
リ本憲ノ豫算額ノ僅少ナル故ヲ以テ其誤見タルヲ謝セサル
可ラスト云フヲ得ヘケンマ憶ニ當時ニ於テ斯ク豫算ノ額ヲ謬
ル所以ノ者ハ他ナシ或ハ動産ノ額ヲ過算シ或ハ不動産ニシテ
既ニ租稅ノ負擔ヲ負フ者ハ悉ク除算シテ相續稅ノ區域外ニ措
クヘキヲ却テ之ヲ除カサルニ因ルカ如シ之ヲ要スルニモルリ
ンク「ケイル」ンスノ二氏ハ一ハ訟師タリ一ハ公平裁判所ノバレ
ストルタルヲ以テ此ニ點ニ就テハ確説ヲ持スルヲ得ヘキノ地
位ニ在リナカラ却テ此誤謬アルハ抑々怪ムヘキニ冰スマ又此
ニ氏ハ土地ノ継承ハ願ル直接ニ在ルヲ以テ遺物稅ニ比スレハ

稍々其率ヲ低減セサル可ラサルノ理ヲ推究セサリント云ハサ
ル可ラス將タ今日ニ在テ相續稅ノ收入スヘキ昔ハ之ヲ脱漏ス
ルニ因テ其額ヲ減却スルノ實跡アルヲ見ス

千八百五十九年本憲ニ於テハ維多利亞第五十一章第十六七款
第十一節ヲ以テ准許スル利益ヲ猶他ニ擴充スヘキノ裁可ヲ得タ
リ蓋シ此法令ノ趣旨タルヤスリング氏ノ著書ニ記スル所ヲ以
テ瞭然ナリトス其文ニ曰ク遺物稅法ノ改正ニ因テ特ニ納稅者
ノ利益タルヘキ他ノ法令アルハ茲ニ之ヲ記載セサル可ラス其
法令ニ據ルニ遺言又ノ血縁ナキ婚若クハ媳婦ニ遺物ヲ與フル
氏ハ一割ノ稅ヲ納メサル可ラスト云ヒ又相續稅法ニ從ヘハ如
斯キ互ニ併行ス可ラサルノ法ハ之ヲ廢止スヘク且夫若クハ妻
タル者ハ本稅ノ額ヲ算計スルニ當リ更ニ遺言人ニ親近ナル者

（幸有スシト云ヘリ云ト然リ而シテ此法令ニ據ル）

ノ例ニ準スルノ特典ヲ准許スル所ノ利益ハ其法ヲ發スルノ後
ニ於テ死亡スル者ノ遺言ニ因テ繼承スヘキ遺物ニノミ之レ限
ルト雖モ其制限ノ行ハル可ラサルヤ固ヨリ言ヲ俟タサルナ
抑々從來ノ~~經驗~~ニ據ルニ稅法ヲ施行スルニ當リ或ハ二三ノ專
制ニ臨リシ者ナキニ非ス然リト雖モ一タニ正理ニ基クノ法ヲ
發スルニ當リヤ專制ノ政ハ亦之ヲ實施ス可ラス彼ノ維多利亞
第十一節ノ如キモ亦然リ一方ニ於テハ業既ニ舊法ノ不正ナル
ヲ確認シテ併行ス可ラサル者トシ又一方ニ於テハ同日ニ納稅
スル者ニシテ甲ハ正理ノ法ニ從テ收稅セシメ乙ハ非理ノ法ニ
從テ收納セシムヘシトス是豈ニ不正ノ甚シキ者ニ非スヤ如斯
ノ理由ナルカ故ニ閣下ハ本憲ノ建議ヲ嘉納シテ彼ノ第十一節
ノ法令ハ讓与者ノ死亡スルノ時日ヲ問ハズ總テ遺物ノ課稅ニ
施行スヘキヲ令セリ

千八百五十九年ニ於テ愛爾蘭ノ遺言并ニ遺物管理ニ関スル法
令ヲ制定スルヤ其第九十四條及ニ九十五條ヲ以テ英愛兩國ニ
於ケル所有物ヲ繼承スルニハ各遺物証書ヲ領セシムルノ法ヲ
廢シ更ニ左ノ規則ヲ設ケテ英倫ニ於ケル遺物証書ハ之ヲ愛爾
蘭ノ所有物ニ併用スルヲ得セシメタリ其文ニ曰ク遺物管理者
ハ遺物ヲ處分スルニ當リ其價額ヲ記スル所ノ証書ヲ作り之ニ
誓詞シ且其全價額上ニ復要ナル証印ヲ請フヘシ然ルハ本憲
ニ於テハ該証書ヲ遺物裁判所ノ主簿ニ送付シ以テ兩國ノ遺物
上ニ復要ナル印稅ヲ收納シタルヲ報ス故ニ其証書ハ該裁判
所ノ証印ヲ得テ該裁判所ニ於テ附与スル者ト同一ノ効力ヲ有
スヘシト又翌年ニ於テハ更ニ此理ヲ擴充シ合衆王國ノ甲部ニ
住居スル者ニシテ乙部ニ財産ヲ有シ其人ノ死亡スルニハ其遺
物ノ全額ヲ一紙ノ証書ニ記スルヲ准許シテ印稅ヲ收納セシ

メタリ然リト唯此刑ハ唯々人民ノ情願ニ因テ許ス所ナレハ
英蘇愛ノ三國ニ於ケル所有物ニ就テハ各々其稅ヲ納メ可
ラサルマ固ヨリ論ヲ俟タカルナリ
千八百五十九年ニ於テ百万磅ニ超過スル遺物ニハ其價額ノ増
進スルニ隨テ其稅ヲ増重スルノ法ヲ設ケタリ是ヨリ先キ千八
百十五年始メテ今日施行スル所ノ從價稅法ヲ制定スルヤ此時
以來百万磅ニ超過スル所有物ヲ讓与スルノ例ハ甚々尠ク隨テ
其額ニ超過スル者ニ差等ヲ設ケテ其稅ヲ重セサルノ故ヲ以テ
政府ノ歳入ニ著シキ影響ヲ興フルニ足ラスト唯此當時ニ於テ
増重稅法ヲ擴充シテ更ニ百萬磅ニ超過スル所有物ニ及シタル
所以ノ者ハ假令之ヲ讓與スルノ例甚々尠ナキモ同比例ノ稅
ヲ收メサル可ラサルノ理由如何ハ姑ク指テ論セス今マ貿易ノ
振張ニ始計ノ典起スルヤ自ラ其所有物ノ價直ヲ増加スルニ至

レハナリ

既ニ本憲第三回報告書千八百九十五年ニ記スルカ如ク英倫ト蘇格蘭
ノ間ニ於テ遺言ニ関スル法令及ヒ規則ノ同カラサルヤ為メニ
之ヲ實施履行スル能ハサルニ至レリ是レ他トシ蘇格蘭ニ於テ
ハ始メテ遺物目録上ノ印稅ヲ課賦スル以來遺物ノ價額ヲ讓典
者カ死セスルノ日ヲ以テ算定シテ其稅ヲ收ムルモ英倫ニ在テ
ハ遺言狀ヲ典付スルノ日ヲ以テ其價額ヲ算定セラル可ラサレ
ハナリ故ニ千八百六十年ニ於テハ此等ノ不均ナカラシメンカ
為メニ更ニ遺物目録ニハ管理者カ誓詞スルノ日ヲ以テ所有物
ノ價額ヲ算定シ猶其時ニ至ルマテノ利金ヲ併セテ印稅ヲ課ス
ヘシトノ法令ヲ發セリ
左ノ數項ニハ千八百六十年ヲ以テ始メテ遺物稅及ヒ遺物目録
稅ヲ課スルニ決セリ

英倫ニ於テ利子ヲ拂フヘキ印度政府ノ公債証書及ヒ約定切
子

蘇格蘭ニ於テ嫡嗣遺物受托人若クハ管理者ノ為メニ繼承ス
ヘキ所有物ヲ以テシ或ハ該國ノ公債証書ニ依テ保管セシメ
タル金錢

曩ニ蘇格蘭ニ在勤スル本憲ノ驗教官ハ屢々書ヲ本憲ニ致シテ
蘇國ノ法ニ據レハ彼ノ公債ニ依テ保管セシメタル者ハ不動産
ニシテ動産ニ非ス故ニ遺物目録稅ハ之ヲ免除セラルヘキヲ照
會セリ然ルニ千八百六十一年ニ於テ相續稅法第一款中ニ動産
ノ二字ヲ追加シタルハ蓋シ此驗教官ノ建議ニ因テ然ル者ナレ
ハ遺物稅及ヒ遺物目録稅ノ場合ニ於テモ亦同一ノ條款ナラ
可ラサルナリ

千八百六十一年維多利亞第九十二章ヲ以テ千八百六十一年第
六月二十八日後ニ死亡スル者ノ負債或ハ本人ノ死亡後ニ於テ
償却スヘキ負債若クハ本人ノ死亡前三箇月ニ於テ實際ニ他人
ニ贈與シタル証書ノ為メニ交付スヘキ約定金等ハ遺物税申述
書中ニ分記スルヲ要セサルヲ令セリ蓋シ此法令ノ旨趣タル
ヲ前ニ判法ニ因テ准許セル税額ノ還償ヲ廢停セシカ為メナリ
千八百六十二年ニ於テ或ル死亡人ヨリ合衆王國內ノ人民ニ辨
清スヘキ公債証書ノ負^連ハ死亡ノ時ニ於テ其連負ノ何ノ地ニ
在ルヲ論セス總テ遺物税若クハ遺物目録税ヲ課スヘキヲ令シ
以テ前法ノ偏頗ナル所ヲ畫一セリ其英倫若クハ愛爾蘭ニ住ス
ル人民ヨリ蘇格蘭或ハ其他ノ地ニ於テ死亡スル者ニ辨清スヘ
キ公債証書ノ連負ニシテ死亡人自ラ該証書ヲ保有スル^ルハ其
証書ノ英倫若クハ愛爾蘭ノ境內ニ在ラサルノ故ヲ以テ從米遺

物税ヲ課スルヲ無ク又蘇格蘭ノ法ニ據ルニ公債証書ハ蘇國ノ
境內ニアルモ負債主ノ境外ニ在ルノ故ヲ以テ敢テ遺物目録税
蘇國ノ遺物目録税ハ英ヲ課セス
千八百六十四年ニ在テハ遺物税ニ關シテ二項ノ改革ヲ施シ即
千其一ハ從前二十磅以下ノ所有物ニ免税スル所ノ區域ヲ擴充
シテ百磅以下ト為シ其二ハ海上ニ在ル船隻ニ税ヲ課スル是十
リ
千八百六十五年維多利亞第百四章ハ唯遺言税遺物税及ニ相續
税ノ不納金ヲ回收スルニ就テ會計裁判所ノ處分法ヲ示スノミ
借地ヲ抵當ニスル負債ハ千八百六十五年ノ維多利亞第百四章
ヲ以テ遺物税ヲ算定スルニ當リ之ヲ除去スヘキヲ令セリ是蓋
シ千八百六十六年ノ年報書ニ記スル本寮ノ意見預テカ^リト
云ハサル可ラス其文ニ曰ク茲ニ一種ノ負債ノ常例ヲ以テ論ス

可ラカル者アリ夫レ借地ヲ抵當ニスル負債タルマ其他ノ繼承
人カ之ヲ償却スルヲ得ルノ状ニ陥ル比々皆然ラサル無シ然
ルニ遺物税法ニ據レハ現ニ遺言状ヲ作ルノ日ヲ距ル三年前以
来其負債ヲ償却スル者ニ決サレハ之ヲ除クヲ得ルカ故ニ遺
物税ハ自ラ死亡人ノ賤産ノ實額ニ比スレハ自ラ其多キヲ課ス
ルニ至ル

如斯ナルカ故ニ本憲ニ於テハ前年ノ報告書ヲ以テ遺物受託人
カ遺物税申述書ヲ呈スルニ當リ明カニ此種ノ負債ヲ掲記シテ
之ニ課税スルヲ免シメラレシトヲ建議セタルニ政府ニ於テハ
之ヲ法官ニ付シテ其當否ヲ審察セシメ遂ニ其意見ノ當ヲ得
ルニ決シタリ然リト雖モ本憲ニ於テハ尚ホ今日ニ至ルマテ借
地人カ此特典ヲ享有スルノ正理タルトヲ信シテ敢テ疑ハサル
ナリ故ニ遺物税ハ借地ヲ抵當ニスルノ負債ヲ除テ借地人カ死

七スルノ時ノ實額ニ因テ課收セラレシトヲ冀望スト云

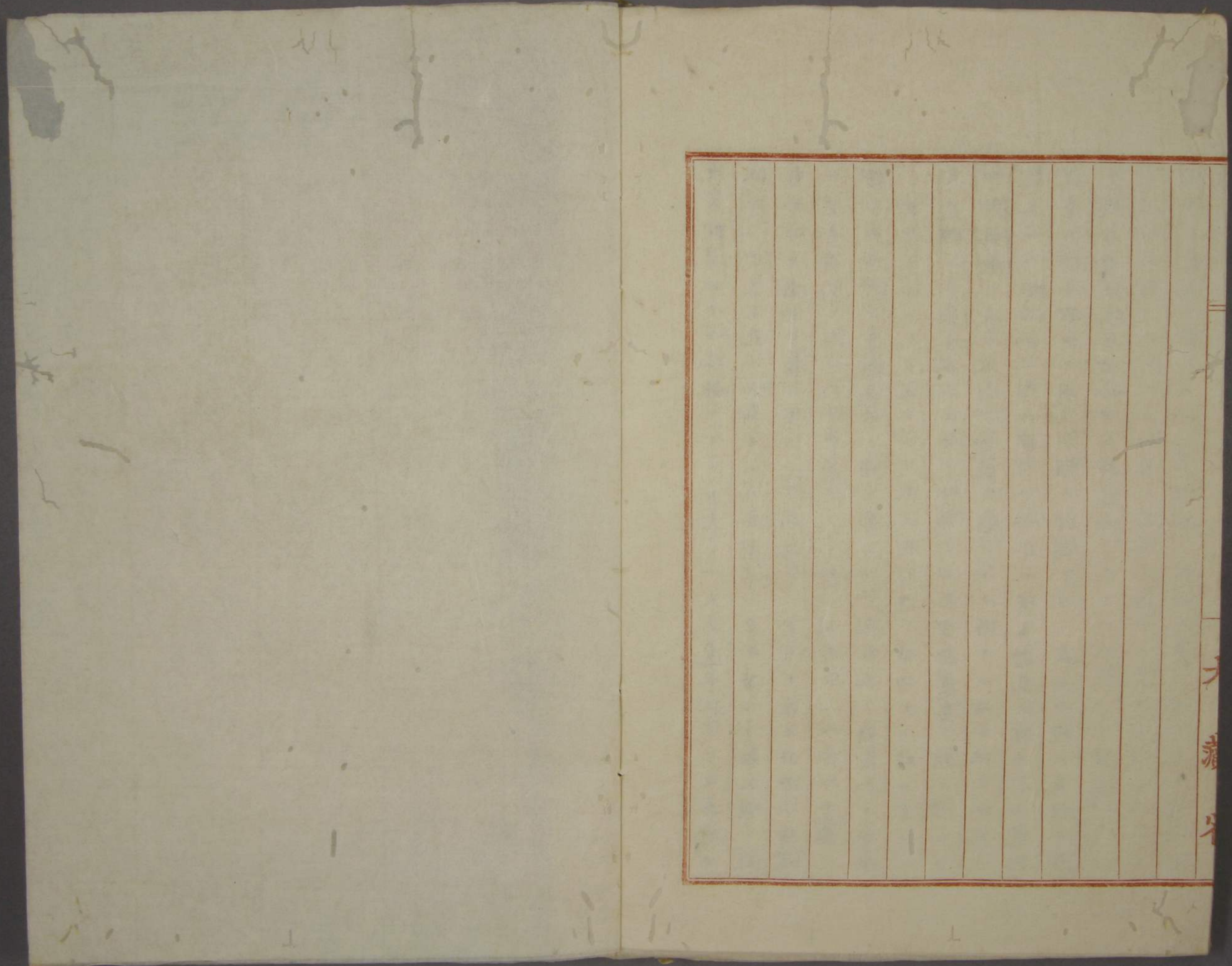
又維多利亞第四百九章第九款ヲ以テ本憲ニ附スルニ遺物税及ニ
相續税ノ延納金ニ利子ヲ收ムルノ權ヲ以テセシカ其事タルマ
既ニ實際ニ施行スル所ノ昔ニシテ敢テ今日ニ始ルニ決ス故ニ
其法令ハ唯々慣例ヲ公告スルニ過キサルナリ然リ而シテ利子
ヲ收ムルノ事タル或ハ納税延滞ノ罪ヲ贖フノ理ニ出ルト看做
サ、ルヲ得スト雖モ今マ法令ヲ以テ明カニ利子ヲ併セテ延納
金ノ收入ヲ准許スルハ則チ贖罪金ノ性質ヲ廢棄センカ為メナ
リト云ハカル可ラス

夫レ遺物税及ニ相續税ヲ課スルニ死亡人ノ住所ニ関スル法令
ニ至テ不便ヲ免レサル所以タルマ曩ニ屢々閣下ニ建議スル所
ヲ以テ其旨ヲ諒セラルヘシ然リ而シテ此事ニ就テハ近頃改正
スル所ノ者アリト雖モ未ダ以テ其不便ヲ療スルニ至ラズ蓋シ

本寮ノ意見ニ據ルニルソ遺物税ハ英國臣民ノ何ノ地ニ於テ死
亡スルヲ問ハス既ニ其住家ヲ合衆王國內ニ定ムル以上ハ之ヲ
其動産ノ全額上ニ課シ又相續税ニ至テハ相續人ト讓與人ノ住
所ハ何ニ在リ或ハ之ヲ相續スル地ハ何ニ在ルヲ問ハス既ニ讓
与スヘキ土地ノ合衆王國內ニ在ル以上ハ之ニ課税スヘシトノ
明文ヲ掲ケハ當ニ政府ノ歳入ヲ增多スルノミナラス亦以テ今
日ノ税法ヲ實施スルニ於テ確實ナラサルノ弊害ヲ除クニ至ル
ヘキナリ

抑々遺物税等ノ收入額ニ於ケル年ニ増減昂低ノ差異アリテ本
寮ニ於テハ其増減ノ比較ヲ僅々二年間ニ限ルノ故ヲ以テ實ニ
其原由ノ如何ヲ確言スルヲ得スト唯此今試ニ一二ノ的例ニ就
テ之ヲ説カシニ千八百六十六年ニ於テハ唯一人ノ遺言狀ニ依
テ遺物税及ニ相續税ヲ收ムルヲ十五万磅ニ至リ而シテ其遺言

税ハ則チ四十二万磅ナリトス夫レ一人ノ遺言狀ニシテ其税ヲ
收ムルノ多キ既ニ如斯ナレハ其翌年ニ至テ著ルク收入額ノ減
却スルヤ固ヨリ辨ヲ俟スシテ明カナリ然リト雖此等ノ増減
ハ貿易錯乱ノ年ニ於テ資本上ノ金利ノ減却スルニ依ル者殊ニ
甚シトス抑々遺物税等ノ額ヲ算スルヤ死亡人ノ財産即チ資本
ノ時價ニ依テ之ヲ定ムルカ故ニ其時價ノ減却スル時ニ當テハ
其税額モ亦隨テ減少セカルヲ得ス加之金融壅塞ノ期ニ際シテ
ハ納税者ハ直ニ政府ノ督促ニ應スルヲ得カルハ他ノ納税ニ
於ケルカ如シ故ニ千八百六十六年ノ貿易錯乱ノ時ニ於テ遺物
税等ニ依テ收ムル歳入ノ額ニ増減アルハ蓋シニ種ノ原因ナリ
テ然ル者ナリト云ハサル可ラス



六
第
一

